

W・R・ビオンの変形理論と精神分析

中 野 明 徳

【要 旨】

W・R・ビオンはグループ研究から始め、次に精神病研究を進め、メラニー・クラインのいう投影同一化や妄想-分裂ポジションの理論で思考障害を理解した。クラインの死後、カント哲学を取り入れた独自の「変形理論」を提唱し、究極の対象から、患者が何を变形しているのか見極めようとして、横軸が解釈カテゴリー、縦軸が思考の発達を示した「グリッド」を作成した。ビオンにとって、精神分析とは情動体験を生む他者との関係を扱うことであり、母親と乳児をモデルとして、対象が投影される「容器」と容器に投影できる「内容」として捉えた治療論を展開した。

【キーワード】

基底的想定集団、投影同一化、妄想-分裂および抑うつポジション、変形理論、容器と内容

I. はじめに

本小論はウィルフレッド・ルプレヒト・ビオン(Wilfred Ruprecht Bion, 1897-1979)が唱えた「変形理論」(transformation theory)と、彼の精神分析の実践論を総覧したものである。ビオンの業績は3つの時期に区分される(乾監修, 2015)。第1期はビオンが軍医として従軍していた頃から始まる1940年代のグループ研究である。1945年からビオンはメラニー・クライン(Melanie Klein, 1882-1960)の個人分析を受けるようになり、これにより『グループの経験』(1961)で、無意識的に働く集団を論じている。第2期はクラインの理論に強く影響を受けた1950年代の精神病研究である。この時期に発表された論文は、『再考』(1967)にまとめられている。第3期が1960年代のメタサイコロジーの研究で、『経験から学ぶこと』(1962)、『精神分析の要素』(1963)、『変形』(1965)、『注意と解釈』(1970)の4書があり、これらは『Seven Servants (邦題: 精神分析の方法)』(1977)としてまとめられた。この時期のものはクライン理論が彼独自に咀嚼され、科学哲学的に論じられているので難解である。

第3期の出発点は、分析セッションそのものの現象学である。被分析者のもつ情動体験が、分析家の情動状態、考え、欲望などに関わる中で、いかに変形されていくのかという現象を解明するために、哲学、数学、精神分析の概念が用いられる。ビオンが提供したいのは精神分析理論よりも実践論であり、「究極の現実、絶対的真実、物それ自体」をいかに把握するかにある。

本論は、ビオンがいかにフロイトやクラインの理論を超えて、「変形理論」を展開したかをみていき、ビオンが考える精神分析の実践について考察する。

II. ウィルフレッド・R・ビオンの生涯

W・R・ビオンの年譜を表に示した（Symingtonら， 1996）。ビオンの死後、自叙伝『長い週末』（1982）が公表されているが、それは1897年から始まり1919年で終わっている。この書の6割が第一次世界大戦で占められており、彼の戦争体験の大きさが示唆される。

ビオンの両親は英国人であるが、土木技師であった父親の仕事の関係で、ビオンは1897年9月8日、インド北部にあった旧英領インドの州ムットラで生まれた。両親はイギリス紳士階級で構成される特権集団にかろうじて留まる中流階級であった。父親は愛国心が強く、神経質で厳格な人で、体罰を加えることもあった。母親は専業主婦、気むずかしい人で情緒表現に乏しかった。ウィルフレッドと3歳年下の妹は、母よりもインド人の乳母を慕ったといわれている。ビオン8歳のとき、英国のパブリック・スクール（全寮制寄宿学校）に送られ、2度とインドに戻ることはなかった。彼はパブリック・スクールの中で劣等感に襲われたが、体格がよくスポーツが得意で、水球とサッカーの技能のおかげで窮地を免れたという。

ビオンが17歳のとき第一次世界大戦が始まり、19歳（1916年）で陸軍に入隊した。ビオンは際だった勇気の持ち主であり、1917年フランス北東部での戦闘で、ヴィクトリア十字勲章に推挙されたが、彼はそれを望まず殊勲章を受けた。ビオンは恐怖を意識し、常に集団から離れたものとして自らを意識して集団を分析しており、シミントンら（Symingtonら， 1996）は彼を「アウトサイダーの最も極端な例の一人」と指摘する。イギリスの保養地チェルトナムに母親を訪ねたとき、ビオンは「私が尊敬している人との関係は耐え難いもので、特に母親がそうであった。私の期待は、イングランドから、そして母親から逃げるために前線に戻るだけだった。私の唯一の望みは母親も私がいなくなる願望をもつことであった」と記している（『長い週末』 p266）。戦争中の母親との面会に際して、ビオンの母親に対する恐怖感の特筆すべきことで、しかし他方で母親を尊敬していたというのであるから、これはビオンの投影によるものであろう。

ビオンは戦争から戻った1919年から、オックスフォードのクイーンズ・カレッジで歴史、哲学を学ぶ（21年まで）。この経験はその後のビオンに大きな影響を与えたといえるであろう。ビオン25歳の時、母校寄宿学校に教師として赴任する。ビオンは体が大きく、戦争の英雄でもあり、無表情な顔つきとぶっきらぼうな話し方をするので、当初は生徒たちを怖がらせたといわれる。この教師時代に、ある生徒の母親から息子を性的に誘惑したと訴えられて解雇され、ここでも挫折感を味わった。

ビオンは1924年からロンドンのユニバーシティ・カレッジ病院で医学を学び、1930年に医師資格を得た。1933年からタヴィストック・クリニックで働き（48年まで）、1937年（40歳）からジョン・リックマン（John Rickman）から訓練分析を受けるが第二次世界大戦で中断した（39年）。1940年、女優のベティ・ジャーディンと結婚した。1945年、ビオンがフランス進軍中に娘が生まれたが、妻は出産直後に亡くなった。

1945年（48歳）から、当時63歳のメラニー・クラインの分析を受け始めた。当時、20代後半のスイーガル、30代半ばのローゼンフェルトもすでにクライン門下として活動していたが、2人とも外国からの移民であった。クラインは自分の理論を精神病患者への分析を実践してくれる英国人医師を探していたといわれる。その10年前、ウィニコット（1896-1971）がいたが、彼は1945年頃にはクラインから距離を置き始めていた。ビオンは1950年に論文「想像上の双子」を提出し、精神分析家として遅まきながらスタートした。1951年にタヴィストックで見かけた28歳のフランチェスカと再婚した。

1960年代になると、ビオンの代表作『経験から学ぶこと』（1962）、『精神分析の要素』

(1963)、『変形』(1965)などの著作が次々と発表された。同時に、英国精神分析協会会長やメラニー・クライン・トラスト委員長などの重要ポストに就いたが、これはビオンの望むところではなく、遠くアメリカで自由に活動することを考えた。1968年、ビオン(71歳)とフランチェスカは、彼の両親がしたように15歳と12歳の子どもを英国の学校に残し、アメリカ・カリフォルニア州ブレントウッド(サンタモニカ近郊)に移り、そこで個人開業した。1970年代は、ロサンゼルスを拠点に、北米、南米、ヨーロッパでセミナーや講演を行った(Bion,1994)。1979年、ビオン夫妻は1年の半分を米国、残りを英国オックスフォード近郊アピンドンで過ごす計画であったが、ビオンは急性骨髄性白血病と診断されて、11月8日82歳で亡くなった。

表 W・R・ビオンの年譜

| 西暦 | 歳 | 出来事 |
|------|----|--|
| 1897 | 0 | 9月8日、インド北部ムットラにて出生 |
| 1905 | 8 | 単身で英国に戻り、ビショップス・ストートフォード・カレッジの小学校に入る(−15年) |
| 1914 | 17 | 第一次世界大戦勃発 |
| 1916 | 19 | 陸軍に入隊 |
| 1917 | 20 | フランス北東部の戦闘、後に殊勲賞に推挙 |
| 1918 | 21 | フランス北部アミアン近郊で戦闘、生き残る |
| 1919 | 22 | オックスフォードのクイーンズ・カレッジで近代史、哲学を学ぶ(−21年) |
| 1922 | 25 | 母校ビショップス・ストートフォード・スクールにて働く(−23年) |
| 1924 | 27 | 精神分析に興味をもち、ユニバーシティ・カレッジ病院(ロンドン)にて医学を学ぶ |
| 1930 | 33 | 医師資格取得、外科においてゴールド・メダル(最優秀賞)を受ける |
| 1933 | 36 | タヴィストック・クリニックで働く(−48年) |
| 1937 | 40 | ジョン・リックマンに訓練分析を受ける(−39年) |
| 1940 | 43 | 女優のベティ・ジャーディンと結婚(45年妻は女兒を出産後死亡) 第二次世界大戦のために、陸軍病院にて精神科医として勤務(−45年) |
| 1945 | 48 | メラニー・ラインの分析を受け始める(−53年)、タヴィストック・クリニック 所長(−46年) |
| 1948 | 51 | 英国精神分析協会の会員資格取得、ロンドンで精神分析個人開業 |
| 1950 | 53 | 論文「想像上の双子」発表 |
| 1951 | 54 | 28歳の女性フランチェスカと結婚(52年と55年に一男一女を授かる) |
| 1956 | 59 | 英国精神分析協会ロンドン精神分析クリニック所長(−62年) |
| 1960 | 63 | メラニー・クライン死去 |
| 1961 | 64 | 『グループの経験』出版 |
| 1962 | 65 | 英国精神分析協会会長(−65年)、『経験から学ぶこと』出版 |
| 1963 | 66 | 『精神分析の要素』出版 |
| 1965 | 68 | 『変形』出版 |
| 1966 | 69 | 英国精神分析協会トレーニング委員会メンバー、メラニー・クライン・トラスト 委員長 |
| 1967 | 70 | 『再考』出版 |
| 1968 | 71 | ビオン夫妻アメリカ・カリフォルニア州ブレントウッドに移住、個人開業(−79 年)、南米、ヨーロッパで講義、スーパーヴィジョン |
| 1970 | 73 | 『注意と解釈』出版 |
| 1977 | 80 | 『セブン・サーバント(邦題:精神分析の方法)』出版 |
| 1978 | 81 | ロサンゼルス精神分析協会名誉会員 |
| 1979 | 82 | 英国オックスフォードに帰る、11月8日急性骨髄性白血病で死去 |
| 1982 | | 自叙伝『長い週末』出版 |
| 1994 | | 『臨床セミナー』出版 |

Ⅲ. グループの研究

ビオンのグループ研究は1940年代から始められ、『グループの経験』(1961)が出版されたのはクラインの没後である。クラインはグループの意義を感じていなかったといわれる。本書は3部から構成されている。なお、以下の下線は筆者によるものである。

1. 治療における集団内緊張—集団課題としての研究(1943)

第1部はビオンが軍医時代、ノースフィールド(Northfield)の軍精神病院社会復帰訓練病棟で行われた集団療法の経験が総括されており、やはり軍医であったジョン・リックマンとの共著で発表されたものである。

百名余りで構成された訓練病棟で、すべてのメンバーは毎日1時間の身体的訓練をすること、企画された集団(手芸、軍の通信教程、大工、地図解読など)に一つないいくつかに所属しなければならないこと、集団に参加できないと思う者は休憩室に行くことが毎日公示された。その結果、20%の人がこれに参加し、残りの80%は怠け者であるという不満をもつ患者が現れてきた。ビオンはその処理を自分の責任にすることを拒否し、社会の中に同じような非協力的な人間がいることを指摘した。ビオンは、「どのような問題も、その境界が明確になるまでは解決を試みないという決定は、健康な忍耐の後で、その集団が科学的な真剣さで問題に取り組むべきであるという確信を生み出すのに役だった」という。この計画が開始された最初の1ヶ月の間に大きな変化が起き、いろいろな集団が活動を始め、1ヶ月の終わりには訓練病棟に属しない患者たちもここに来るようになり、病棟は間違いなく団結心をもったという。しかし、この実験はビオンの転任によって6週間で中断した。

2. 集団についての経験

1) 集団の反応

ビオンは1948年、タヴィストック・クリニックの専門委員会から治療集団をもつことを依頼された。ビオンが「集団内緊張」(group tensions)を研究した経験があったからである。そこで、8~9名とビオンもそのメンバーの一人であるような集団が始まった。沈黙が続き、ビオンが何かするように期待されて落ちつきなく感じ、ビオンは「集団に対して不安を感じている」と打ち明ける。こうした集団の雰囲気改善すべくX氏が、ビオンの目的が何であるか、直接質問を向けてきた。ビオンは「集団の緊張について研究したい」と説明するが、X、Y、R氏は「委員会がビオンにこの集団を託したことには、ある立派な目的があったに違いない」と再確認した。

しかし、それ以外のメンバーからしだいにビオンに対して不満が現れてきて、集団がそのまま継続できるかどうか疑わしくなった。こうした緊張した雰囲気の中で、ビオンがそこになかったように討論から除外されることがあった。こうした事態に対して、Q氏は、「ビオンが説明しないのは、集団の性質を集団自身で経験するためであり、ビオンは十分な理由をもっているはずだ」と論じて集団の緊張がゆるんだ。集団は何も説明しないビオンを高く評価したのである。そこでビオンは、「集団はいまや私をなだめすかし、皆さんの希望をいれて、私の行動が、皆さんが期待し、皆さんがよく知られているものに一致するように私の行動を改めさせようとしている」と説明し、「集団が本質的にQ氏の発言を無視している」と述べた。するとメンバーは集団にいることの意味がわからず、本当に困惑し、ビオンが集団のメンバーにすぎないという点は受け入れられない。やがて集団は互いに怒りっぽくなったり、不安になってきたりした。彼らは誰かがリーダーになることを期待した。ビオンは、リーダーを熱望することについて、「集団の

中に蒼古的なものとして実用とはなれて働いている、ある情緒的な遺物であるか、そうでなければ、われわれがまだ明確にできていないが、このような人物の存在を必要とする状況の認知があるのではないかと解釈する。

2) 集団心性

集団内のメンバーの言動は、各人のパーソナリティと集団への見方を反映するが、あるときは匿名で(anonymously) そうしたいと願ったものもある。ビオンはこの匿名の寄与がなされるたまり場として「集団心性」(group mentality)を仮定し、これにより欲求が満たされるといふ。ビオンは、「集団は集団によってのみ与えられる精神生活の欲求のなかのあるものを、個人に与えることができる潜在能力をそなえている」と仮定し、個人の欲求を満足させる集団の力は、特有の「集団文化」(culture of group)を作って対応するという。集団をリーダーとそれに従う者とで構成しようとする試みは文化であると説明する。

3) 基底的思想

ビオンは集団内に繰り返し現れる行動の型に気づくようになり、集団心性を修正してこれを「基底的思想」(basic assumption)と呼ぶ。それは以下のような行動として出現する。

①「対」(pair)：2人のメンバーが討論に集中し、互いに相手にかかりきりであり、集団も全体としてそうみている。2人の関係は性的なものであり、集団として会合してくる目的は集団を維持するためだという基底的思想である。

②「闘争あるいは逃避」(fight or flight)：人間が集団を選択するのは、何者かと闘争するために、あるいはそれから逃避するためであるという基底的思想である。

③「依存的」(dependent)：未熟な有機体のために、安心感を与える機能をもった外的対象が存在するという基底的思想である。これは一人の人物がたえず集団の要求に答え、残りの者は要求が満たされる位置にいることを意味する。

「対集団」、あるいは「闘争-逃避集団」に特有な情緒的経験を避けるために「依存集団」になってくることが珍しくない。集団が逃げている問題に本気で取り組むことが何を意味するかを分析家にまかせて、集団はリーダーに権威をもった行動を期待するからである。もし個人が自己の安定以上のものを要求すると、対集団あるいは闘争-逃避集団の構造を引き出してしまう。

4) 原始心性と基底的思想

ビオンは「基底的思想と結びつく情緒状態は、互いに他の2つの基底的思想に固有な情緒状態を排除する」といふ。しかし、知的レベルでの各人の協力によって形成される「知的集団」(sophisticated group)には固有な情緒状態を排除することがない。「知的集団」は通常、「課題集団」(work group)とも呼ばれ、ある特定の課題を遂行するためには知的な方法による協力が必要である。課題集団が1つの基底的思想と共同した場合、同時に作動しない他の基底的思想の運命を説明するために、ビオンは「原始心性」(proto-mental)現象の存在を仮定し、「原始心性の体系のなかには、3種の基底的思想の原型が存在する」という。ビオンが描く原始的体系では、「身体的・心理的および精神的なものが未分化である。それは1つの母体(matrix)であって、そこから最初は、互いに不十分に結びあった別個の感情であるようにみえる現象が出現してくる。基底的思想に特有な情緒が、集団の心的生活を強め、浸透し、ときには支配するために流れ出るのはこの母体からである」と説明する。もし課題集団が依存的な基底的思想集団の情緒で満たされると、他の2つ基底的思想はこの原始心性の領域に閉じ込められるとみた。

5) 集団とリーダー

分析家が精神分析的な解釈を与えようとする衝動に負けて、個人に対して解釈を与えるやいなや、集団は分析家に依存する患者で構成される状態を強めてくる、すなわちbaD（依存的基底的

想定)となってくる。ビオンは、ba(基底的思想)に沿って行動する際に、集団と結合しようとする個人のレディネスを「誘意性」(valency)と名づけ、この語をpm(原始心性体系)の中の事象に使用した。

3. 集団力学

現実的な課題に向けられた「課題集団」は、強力な情緒的衝動特性をもった精神活動に阻止される。こうした活動はすべての集団に共通な「基底的思想」から発するものと仮定され、クライン理論から説明された。

第1の仮定は「依存的想定」で、集団が物質的・精神的な援助や保護のために依存しているリーダーに支持を得ようとして会合する。ここでの感情的結びつきは罪業感やうつ感情である。集団療法における重要な解釈は分析者自身の情緒的な反応力によってなされるが、クライン(1946)のいう「投影同一化」(projective identification)の受容と関わる。第2の仮定は「対集団」の出現であり、ここで結びつくのは希望の感情、性的なもの、楽天的な観念であり、救世主的願望がある。この希望感情が保持されるためには、リーダーは生まれるべきでないことになる。第3の仮定は、集団が何者かと闘う、あるいは何者からか逃避するために会合するもので、この状況は「闘争-逃避集団」と呼ばれる。ここでの感情は怒りや憎悪であり、何が起きているのかを明らかにしようとするリーダーの試みは阻止されてしまう。

課題集団機能は常に1つの基底的思想と共に存在するが、基底的思想活動はしばしば変化する。活動していない基底的思想の運命を説明するのに「原始心性体系」が仮定された。ビオンは3つの基底的思想について、部分対象の水準で出現し、クラインのいう「分裂」や「投影同一化」の機制と結びついて、精神病的不安に対する防衛反応という性格をもっているとみた。そして、「3種類の心的状況は互いに類似点をもち、そのことは3者が基礎的な現象ではなく、むしろ、より根源的なものだと考える価値のある状態の表現であるか、あるいは、その状態に対する反応であるかもしれない」と推定する。

IV. 精神病の精神分析的研究

ビオンの精神病に関する精神分析的研究は、最初の事例研究「想像上の双子」(1950)から始まるが、研究成果は論文集『再考』(1967)に収められている。ビオンは、物語られたことと与えられた解釈が、同じことの2つの違った言い方か、同じ事実について言っている2つの違ったことにすぎないという疑念が、後の『経験から学ぶ』『精神分析の要素』『変形』で確信に変わったという。この視点から、『再考』ではオリジナルな論文に注釈が付け加えられている。オリジナルな論文ではメラニー・クラインの影響が強く見て取れる。

1. 統合失調症の理論についての覚書(1953)

ビオンは統合失調症の際だった特徴として、対象関係の奇異さをあげ、統合失調症者の言語の使用とその下位機能である対象関係の性質を解明するために、クラインの理論を援用する。統合失調症者の言語は、行為の様式、コミュニケーションの方法、思考の様式の3通りに利用される。統合失調症者は、他の患者なら必要とされるものが思考であると実感する場合、行為の傾向を好む。例えば、誰かがピアノを弾いている理由を知りたくて、ピアノの所まで行きたくがる。それに相反して、あるべき場所にいるべきなのに別の場所にいる時のように、移動の様式として万能的思考に訴える。そこでビオンは、対象を「分裂」させるためか「投影同一化」に仕える言語

の使用について考察する。患者は言葉を物として使用するか、それを分析家の中へと押し入れる自分自身の分裂排除した部分として使用する。言語は行為の様式として、同時に正反対のことを告げることによって対象を分裂させるためにも利用され、これは分析家が内的迫害者と同一視される場合に際立つ。重篤な分裂（スプリッティング）があると、統合失調症者は象徴の使用ができない。ビオンは「乳幼児期の抑うつポジションの始まりにおいて、言語性の思考という要素が増大する」と結論する。

2. 統合失調症的思考の発達(1956)

ビオンは、精神病パーソナリティが非精神病パーソナリティから分岐する地点を論じる。統合失調症パーソナリティの特徴として、①生と死の本能の間の決着のつかない葛藤、②破壊衝動の優勢、③外的および内的現実への憎悪、④希薄だが執拗な対象関係、の4特徴があげられる。これらの奇異な性質が、妄想・分裂ポジションと抑うつポジションを通じて、非精神病パーソナリティのものとは相違している。4特徴が大規模な「投影同一化」（患者のパーソナリティが分裂され、その断片が分析家の中へ投影されること）の行使に至らしめる。言い換えれば、投影同一化が精神病パーソナリティを非精神病的パーソナリティから識別する地点で中心的な要因であり、過剰な投影同一化は抑圧や取り入れを妨げるものであるという。

3. 精神病的パーソナリティの非精神病的パーソナリティからの識別(1957)

ビオンはフロイト(1924)がいう「神経症の自我はその現実への忠誠のためにイド（本能生活）の一部を抑制するが、精神病では、同じ自我がイドに奉仕して現実の一部から撤退する」を引用し、さらにフロイト(1911)がいう自我に「現実原則」(reality principle)がつけられるときに生起する発達に注目する。それを以下に列挙すると、①外界へと向けられた感覚器官の重要性和感覚器官に付着した意識の高まり、つまり「注意」(attention)である。この特別な機能は外界を探索することであり、緊急の内的要求が発生した場合に外界のデータを予め馴染んでおくためである。②「表記」(notation)の体系は、意識の周期的活動の結果を貯蔵することであり、「記憶」(memory)はその一部である。③「判断」(judgement)は、ある特定の観念が真実であるか虚偽であるかを決定することである。④「思考」(thought)は、実験的に行動してみることによって、行動に伴う欲求不満に耐えることを可能にする。ここからビオンは思考の機能とその重要性を拡張する。

ビオンはフロイトの記載に2つの修正を行う。患者の自我が現実からまったく撤退しているわけではなく、万能的空想の中に現実との接触が隠蔽されているとみる。2番目の修正は、現実からの撤退は事実ではなく錯覚であり、空想の支配が強烈であるのは、フロイトのいう精神装置に対抗した「投影同一化」の利用から生じるといえるものである。修正の結果、ビオンは、「精神病と確定診断されている患者のパーソナリティに、神経症機制的犠牲になっている部分と、精神病部分とを含んでいるが、精神病部分の支配が非常に強いので、非精神病部分は曖昧にされている」という。治療的には、自我に向けられた患者の破壊的な攻撃や、抑圧や取り入れの代わりに使われている「投影同一化」が徹底操作されなければならないと主張する。

4. 幻覚について(1958)

ビオンは幻覚の活動について、「パーソナリティの危険な部分に対処する試み」と解釈する。ビオンが報告する事例は、分析者を強烈に操作していたので、分析者自身が独立した対象ではなく、幻覚として取り扱われていると感じられ、分析者の解釈を聴覚性の幻覚として扱っていると

みられた。幻覚は、「迫害対象と感じられる分析者の解釈が、害を及ぼすことなく頭上を通り越していく点で、安堵を与えてくれる性質をもっている」という。

精神病者の夢についてピオンは「精神病患者が夢を報告する前には大量の作業が必要であり、夢を見たとき報告すると、必要なことをすべて言ってしまったと感じる」「精神病患者にとって夢は、起きている間に取り入れられた素材の排出である。精神病的な夢がコミュニケーション可能となるほどのまとまりを持つようになるには、大きな発達が必要でなければならない」と指摘する。ピオンは、幻覚やスプリッティングや投影同一化が支配的な精神状態を「狂気」(mad)と描写する。

夢や他の箇所での全体対象の出現は前進のサインであると同時に、危険の恐れのある抑うつの前駆体であり、おぞましい抑うつを迫害不安で置き換える段階である。ピオンは「抑うつポジション」への前進と後退の段階を重大局面とみなし、「この段階は自殺の危険性が妄想-分裂ポジションへの後退の重要性を曖昧にするからではなく、二次的スプリッティングが後退に内在しているからであり、これを探知して解釈しなければ、発達を危険にするだけでなく、回復の可能性がなくなる」と指摘する。

5. 「連結すること」への攻撃(1959)

分析家は言語性のコミュニケーションと精神分析的経験によって患者との「連結」(link)を構築する。ピオンは、境界型精神病の症状形成の中で、対象を連結する機能を破壊する攻撃が重要であることを示す。その例として、患者が分析者との間の絆として言語を使用することを妨害する意図をもった「吃音」があげられている。別の例として、「眠り」が投影同一化と同じで、患者の心が微細に断片化されて、攻撃的な粒子として流出することを意味した。統合失調症者の夢のない時期は、夢が非常に断片化された素材からできているために、どんな視覚的構成要素も欠いていると認識された。

ピオンは、連結に向けられた攻撃が、クラインがいう「妄想-分裂段階の部分対象関係」に起源があるとみる。患者は自分自身とも部分対象関係をもつので、「私は考える」(I think)とか「私は確信する」(I believe)よりも「のようだ」(it seems)という言い方をすることを観察した。ピオンは、部分対象関係について、「単に解剖学的構造との関係ではなく機能との関係であり、解剖学ではなく生理学との関係であり、乳房ではなく栄養を与えていることや毒をもっていること、愛していることや憎悪していることとの関係である」と注意を促す。

ピオンの関心は乳房やペニスや言語性の思考に関わっているだけではなく、2つの対象間の連結機能にある。クライン(1946)は、正常発達のための前提条件として、「よい対象、とりわけ母親の乳房の取り入れ」を述べているが、ピオンは正常発達の基礎として、「正常な度合いの投影同一化が取り入れ同一化と連合していること」を想定する。患者と分析家、乳幼児と乳房の連結は「投影同一化」による。理解のある母親は、乳児が投影同一化によって処理しようとしているおぞましい感情を理解でき、均衡のとれた姿勢を保持できる。この感情に耐えられずに、それらが入ってくることを拒否するか、乳児の感情を取り入れがもたらした不安の犠牲になった母親に患者は対処しなければならなかった。この結果が患者による過剰な投影同一化であり、発達に荒廃をもたらした。

ピオンは障害の起源として、①患者の過剰な攻撃性や憎悪や羨望という生得的要因、②患者にスプリッティングや投影同一化の使用を拒否する環境、をあげる。患者の好奇心の性質は投影同一化によって探求される。母親がこの機制の使用を拒否すれば、乳幼児と乳房のとの間の連結を破壊し、その結果、学びの基礎となる好奇心の障害に導くことになる。

6. 「考えること」に関する理論(1962)

ビオンは、思考の障害が存在すると思われるときに応用できる理論を提出する。考えることは、次の2つの精神発達がうまく行った結果に基づくものであるという。すなわち、①「考え」(thoughts)の発達で、それらを取り扱うための装置を必要とする。②「考えること」(thinking)と暫定的に呼ぶ装置の発達である。「考えること」は「考え」を取り扱うための装置として存在しなければならない。「考えること」が「考え」の圧力によって精神的に強制された発達であり、逆ではない。

ビオンは、「考え」について、その発達史の性質に応じて、「前概念作用」(pre-conceptions)、「概念作用」(conceptions)あるいは「考え」(thoughts)、最後に「概念」(concepts)と分類する。概念は名前がつけられ、それ故に概念作用や考えが固定化されたものである。概念作用は前概念作用が現実と結びつくことで起きる。前概念作用はカント(Kant, I.)のいう「空の思考」(empty thoughts)(先験的知識)に相当する。そのモデルとして、「乳幼児が乳房への期待に相応した生得的傾向を有しているという理論」があげられ、乳幼児が乳房それ自体と接触したとき、乳房という現実を感知して概念作用が発達するというものである。したがって、「概念作用は満足という感情体験と常に結合すると期待される」という。

ビオンは、「考え」という用語を前概念作用が欲求不満と結びつく場合に限定する。この場合、「無い乳房」(no-breast)あるいは内部に「不在の乳房」(absent breast)として体験される。次の段階は乳幼児の欲求不満耐性に左右され、欲求不満を回避するか、それとも修正するかである。欲求不満に耐える力があれば、内部にある「無い乳房」は「考え」となり、それを「考える」ための装置が発達する。欲求不満に耐性がないと、欲求不満を回避する方向に傾く結果、フロイトのいう現実原則の支配の段階における「考え」の特徴とから大きく離れる。前概念作用と「負の現実化」(negative realization)の併置の産物であるべき「考え」は、ものそれ自体との識別が困難で、排泄だけに適した悪い対象になる。その結果、「考える」ための装置の発達が障害されて、「投影同一化」の装置が肥大する。パーソナリティは現実原則の支配に耐えられないと、前概念作用や概念作用は負の現実化と組む代用として「万能感」を発達させることになる。

ビオンは思考の障害を分析する作業道具として、「アルファ機能」(alpha-function)という概念を導入する。アルファ機能とは、「感覚データ」(sense-data)を「アルファ要素」(alpha-elements)へと変換して、精神に夢思考のための素材を供給したり、それによって覚醒したり、入眠したり、意識的あるいは無意識的になったりする能力を提供すると仮定する。この理論では、意識はアルファ機能に基づき、これにより自分自身を意識できると想定する。しかし、正常な投影同一化が乳幼児と母親の間に築かれないと、アルファ機能の発達が阻まれ、要素を意識的なものと無意識的なものに弁別する発達が阻害される。乳幼児のパーソナリティだけでは感覚データを利用することはできず、アルファ要素の形に変換するためには母親を信頼して排泄しなければならない。

ビオンは、精神にとって利用可能な装置は、次のように四重であると考えている。

- ①「考えること」(thinking)、これは修正や回避と関連する。
- ②「投影同一化」(projective identification)、これは排泄による回避と関連し、正常な投影同一化と混同されるべきではない。(「現実的な」投影同一化は、乳幼児が取り除きたい感情を母親の中に生じさせるように適正に計算された行動として姿を現す。)
- ③「全知」(omniscience)、これは救済者か犯罪者かのいずれか一方だけという原則に基づく。
- ④「コミュニケーション」

ビオンによれば、この装置は広義の思考を取り扱うために考案されており、その中に概念作

用、考え、夢思考(dream-thoughts)、アルファ要素、ベータ要素(beta-elements)などあらゆる対象が含まれる。感覚データが夢思考等に利用されるためにはアルファ機能によって修正や作業を受けなければならないのと同じように、考えが行為へと移し替えられて利用可能になるためには、「公表」(publication)、「コミュニケーション」、「共通感覚」(common sense)がからんでいる。公表の起源は考えの一機能、すなわち感覚データを意識に利用可能にすることである。コミュニケーションの起源は現実的な投影同一化によってもたらされる。乳幼児と乳房との関係が良好であれば、自己には自身の心的な質に耐える能力が発達し、アルファ機能や正常な考えへと進み、個人の社会的能力の一部も発達する。

V. メタサイコロジー：変形理論と精神分析の実践

ビオンの精神病論はメラニー・クラインの影響が強く見られるが、徐々に彼独自の精神分析の実践理論が展開されていくものの哲学的できわめて難解である。後期の4つの著作は、“Seven Servants”(1977)としてまとめられた。ビオンによれば、「知恵の七本柱」とは、What, Why, When, How, Where, Whoであり、それに「見失われている1つ」が7本を完成させるという。

1. 経験から学ぶこと(1962)

本書は、知識の理論と精神分析の臨床に直接関連する情動的経験を実践的な仕方で扱っている。第1章では、因子と機能が定義される。「機能」(function)とは、協同して働いている幾つかの因子に固有の心的活動に対する名前のことであり、「因子」(factor)は他の心的活動と協同して働き、機能を構成する心的活動に対する名前である。因子は直接的ではなく、諸機能の観察によって演繹される。

第3章で、アルファ機能、ベータ要素、アルファ要素が定義される。睡眠中に生じる情動的体験は覚醒中に起きる情動的経験と異なる所はないが、ビオンは、「いずれにおいても、情動的経験の知覚は夢思考に用いることができる前に、アルファ機能によって加工される必要がある」という。「アルファ機能」は、患者が気づくあらゆる感覚印象とあらゆる情動に作用し、この機能が成功すれば「アルファ要素」(alpha elements)が産出され、この要素は夢における視覚像に似ており、貯蔵に適している。もしアルファ機能が障害されて作用しなくなると、患者が気づく感覚印象や情動経験は変化されないまま残り、これを「ベータ要素」(beta-elements)と呼ぶ。ベータ要素は現象とは感じられない、「物自体」(カントがいう不可知の対象)である。ベータ要素は、夢思考で用いられることができず、投影同一化で用いられるのに適し、行動化を生む影響を与える。ビオンは、「ベータ要素は貯蔵されるが、アルファ要素と異なって、記憶というより消化されていない(undigested)事実であり、それに対してアルファ要素はアルファ機能によって消化され(digested)、そのおかげで思考のために利用できる」と説明する。第4章でビオンは、「経験から学ぶためにはアルファ機能が、情動的経験への気づき(awareness)に対して作用しなければならない」と述べる。

第7章では意識と無意識の「障壁」(barrier)としての夢が言及される。ビオンは「夢は、夢を可能とするアルファ機能とともに意識と無意識の作用の中枢にある」という。第8章では「接触障壁」(contact-barrier)が述べられる。ビオンは、「人は睡眠中であれ覚醒中であれ、その時の情動的経験を『夢を見る』(dream)必要がある」と言明する。人のアルファ機能は情動的経験に関連した感覚印象をアルファ要素へと変形し、その要素が増殖してまとまって「接触障壁」を

形成する。接触障壁は絶えず形成過程にあり、意識的要素と無意識的要素の間の接触と分離の点を示し、両者の相違を作り出すという。

第9章でビオンは、ベータ要素によって構成された「幕」(screen)について触れる。「ベータ幕」は夢に似た混乱した状態で、支離滅裂、幻覚に見える混乱とよく似ているが、患者が望むような反応か、分析者から逆転移に満ちた反応を引き出す性質がある。つまり、それらの反応は精神分析的解釈の欲求よりも、情動的な関わり合いを作る欲求と関連しているという。第10章では、接触障壁が破壊されると、「アルファ機能の逆転」が起き、夢思考や無意識的覚醒思考作用はベータ要素との区別が奪われ、ベータ幕が形成されるように投影される。ビオンはアルファ機能が、フロイトのいう自我の機能を含むとみている。

第12章では、母親が乳児を愛するときに表現される「夢想」(reverie)が取り上げられる。ビオンはこの用語を愛情か憎悪に満たされた内容に限定し、夢想は夢想する者が愛している対象に由来するどんな「対象」をも自由に受け取る心の状態であるので、乳児が良く感じても悪く感じても乳児の投影同一化を受け取ることができる。つまり、夢想は母親のアルファ機能の因子であり、ビオンは「投影同一化がのちの思考能力の早期の形態である」と想定する。

第14章でビオンは、「情動的経験」を表現する方法が必要であると述べ、対象間の結合に内在するとみなす3つの因子を選ぶ。①XはYを愛する(love)、②XはYを憎む(hate)、③XはYを知っている(know)であり、これらの結合をL・H・Kという記号で表現する。

第16章で、「K結合」が論じられる。Kは分析者にとって「経験によって学ぶこと」と密接に関連した結合である。もしxKyならば、xはyを知りつつある状態にあり、精神分析的な関係を表している。「xはどのようにして知ることができるのか」という問いは、苦痛に満ちた感情を表現しており、xKyで表す情動的体験に内在している。xKyという関係の修正は、「xがyと呼ばれるひとまとまりの知識を所有している関係」になるまで行われる。

第17章では「抽象化」が取り上げられ、ビオンは「K活動では、自分の情動的経験を意識し、そこからこの経験を適切に表す言明を抽象(abstract)できなければならない。もしこの抽象化が未知の他の体験を表すならば、確信(confidence)が生まれる」という。抽象化は「公表化」(publication)の一段階とみなしうるものである。抽象化によって、分析者は基礎的な仮説を定式化できること、自分が依拠する理論的装備の起源を見失わずに済むこと、従来確立されている理論が経験自体によって吟味できること、等があげられている。誤った表象との結合を示す-Kは、「理解しないこと」「誤った理解をすること」を表す。

第23章では、クラインの「妄想-分裂ポジション」および「抑うつポジション」理論について、ビオンは「選択された事実」(selected fact)を特殊化するために使われたものであるという。選択された事実は、まとまりを発見したという感覚の情動経験の名前である。

第27章でビオンはK結合について要約し、諸機能及びアルファ機能の理論は精神分析的理論ではなく、精神分析の実践者が未知の何かについて考えるのを助ける作業ツールであると述べる。「機能」(function)という用語は「パーソナリティの精神分析的機能」のことであり、記号 ψ (プサイ)を与える。「因子」(factor)という用語はどの機能であれ、それは ψ (ξ)における未飽和の要素 ξ (クサイ)によって表され、それに近い現実化が存在するはずである。何が等号を満たすか、現実化を決定するのは精神分析的探求であるという。

クライン理論の「投影同一化」は、乳児が心の一部である悪い感情を良い乳房へと投影し、それはやがて取り除かれて再び摂取されることである。ビオンはこの理論に対して、対象が投影される「容器」(container)と、容器に投影できる対象を「内容」(contained)という用語で呼ぶ。さらに抽象化して、容器を記号♀で、内容を記号♂で命名する。Kは本質的には2つの対象

の機能であり、最も早期の表れは「母親と乳児の関係」である。それを「口と乳房の関係」として述べてよいが、もっと抽象化すれば「♂と♀の間」である。♂が♀へと投影され、「共存」(commensal)という用語で抽象化され、♂と♀が互いの利益のために依存し共に精神的に成長する。ここで乳児に「♂♀の装置」がアルファ機能の装置の一部として設置される。この装置では、「前概念作用」と適切な感覚資料が対をなして(mate)、「概念作用」を作る。前概念作用と感覚資料の対は繰り返されて、共存的な抽象化となり、♂と♀の成長を促す。成長している♂♀は、記号♂ⁿ、♀ⁿと表記される。

第28章では—Kについて述べられる。ピオンは、Kにおける「投影同一化」の役割を♀と♂の共存関係として記述してきたが、—Kにおいては♀の♂に対する関係は♀+♂と表現され、そこでの+は「羨望」(envy)に置き換えることができるという。羨望が(♂)を満たすのに必要な因子の1つとみて以下のような—Kモデルを呈示する。乳児は恐怖感を分裂排除し、平静な乳房に対する羨望と憎悪を乳房へと投影するために共存関係を阻害する。乳房は死の恐怖の中の良い要素を羨望して取り除き、価値のない残遺物を乳児の中へ押し戻すと感じられ、乳児は言いようのない恐怖を抱える結果に終わる。要素♀と♂の関係は羨望に満ちて剥ぎ取る過程が続き、—♀と—♂は無へと変質していく空虚な優位性・劣位性しか示さなくなるという。

Kでは抽出物と一般物を特殊化し具象化することができるが、—Kでは抽出物と一般物は物自体に感じられ、抽象化ではなく、「剥ぎ取り」(denudation)が最終産物となる。ピオンは、Kと—Kの理論は集団の中の現実化を表し、Kでは、集団は新しい考えや人々の参加で増大し心の健康を導くが、—Kでは、新しい価値は剥ぎ取られ、集団は新しい考えによって価値を下げられたと感じ、集団も考えも生き残ることができないとみる。

2. 精神分析の要素(1963)

第1章でピオンは、精神分析者の作業に不可欠な理論のほとんどすべての組み合わせの変化によって表現するのに必要な「精神分析の要素」(elements of psycho-analysis)を探す。ピオンは最初の要素として♀♂を取り上げ、これによって「投影同一化」の本質的特徴である、「容器」と「内容」の間の力動的関係と呼びうる要素を表現する。第二の要素としてPS↔Dを取り上げ、クラインがいう「妄想—分裂ポジション」と「抑うつポジション」の間の反応を表現する。次にL・H・Kの記号は精神分析的对象の間の結合を示し、それらが抽象された現実化は通常、「愛する」「憎む」「知る」という用語によって表される。

さらにピオンは、「理性」(reason)という語とそれが表現すると考えられる現実化から由来するRと、「観念」(idea)という語とそれが表現するすべての現実化(「思考thought」によって表現されるものを含む)から由来するIという表記法を用いる。Iはアルファ要素すなわちアルファ機能の産物から合成された精神分析的对象を表現する。Rは「情念」(passions)の要求を満たすための機能を表現し、実在の世界において支配的になるようにする。情念はL・H・Kの中にすべて含まれている。Rは、Iが衝動とその満足の間を橋渡しする限りにおいて、Iとも関連する。以上のように、ピオンが探している要素は比較的少数である。

第3章でピオンは、精神分析の諸要素はすべて例外なく「パーソナリティの機能である」とする。抽象化を表現する記号は、カントのいう第一性質(客観的、数学的、物理学的)および第二性質(感覚的、主観的)を知ることができるが、それ自体では不可知の機能を表現している。ピオンは感覚可能な経験を構成するものに対する基準として、「共通感覚」(common sense)、すなわち一つ以上の感覚に共通な「感覚」を提案する。

ピオンは分析者の心の中で、要素は以下の感覚印象・神話・情念という次元をもつものとして

理解されるべきであると主張した。

①「感覚」(sense)の領域の外延(extension)。解釈されるものには感覚の対象であるという性質がなければならない。解釈は、分析者および被分析者にとって、聞こえる、見える、触れる、臭う、のいずれかであるものと分かなければならない。

②「神話」(myth)の領域の外延。精神分析者に利用できる道具であるモデルの作成を神話抜きで考えられない。患者の怒りに、分析者が「行儀が悪いと言われたので乳母をぶちたくなった子どもの怒り」に似ていると付け加えるならば、これは個人的神話の言明である。

③「情念」(passion)の領域の外延。「情念」あるいはその欠如によって、L・H・Kから由来する構成成分を意味する。「情念」は強度と暖かさとともに経験される情動を表現するが、暴力は示唆しない。情念に気づくことは感覚に依拠するものではなく、二つの心が結合していることの証拠である。情念と逆転移は区別され、逆転移は抑圧の証拠である。

第5章でビオンは、思考から行為への翻訳である「決断」(decision)について検討する。分析者は解釈によって介入するかどうかの決断を要求されるので、決断とその構成成分である「孤独感」と「内省」(introspection)は、分析者の観点からは精神分析の要素とみなされるべきであろうという。ビオンは以下に分析者が使用する解釈のカテゴリーをあげる。

①定義。この解釈は患者が連想によって、自分が例えばうつ状態にあることを示しているという形を取る。患者を定義するための解釈である。

②状況が未知で自分にとって危険であるという分析者の不安を、自分自身および患者に対してそうでないと証明する解釈によって否認する仕方現実化を表現している言明。このような事態は逆転移の領域に属している。

③現在および過去の現実化の表現である言明。実例として、前回の面接で起こったと分析者が信じるものを患者に思い起こさせる短い要約がある。フロイトが「表記」(notation)と表示した機能に相当する。

④日常語によって表現できる限りで科学的演繹体系を表現している言明。この言明は、それが由来した現実化を表現しているかもしれないという意味では③と類似性があるが、フロイトが「注意」(attention)として記述したもので、環境を探る機能である。分析者の「私があなただけの注意を促したい点は」という言明である。

⑤定式化は未知を探るために用いられる理論である。この実例はフロイトが精神分析理論を形成するために抽象した「エディプス神話」がある。このカテゴリーに入る理論的定式化の機能は、患者にさらに素材を連想することを促す解釈である。

⑥言明が「操作子」(operator)として用いられる。その目的は伝えることによって患者が自分の発達の問題を解決できるようにすることで、フロイトのいう「行為」(actions)に類似する。

以上のカテゴリーは網羅的でも排他的でもなく、ビオンは、Iのカテゴリー化に従った。

第6章でビオンは、思考の生成論的(genetically)な分類を示す。これは思考障害をもつ患者との経験に基づくビオン独自のものである。

①「ベータ要素」。思考が生じる最早期の母体(matrix)を表現し、生命のない対象と心的対象の性質を帯びているが、両者を区別できない。ここでは、思考は物であり、物は思考である。

②「アルファ要素」。アルファ機能が感覚印象に対して作用した結果を表現し、外的現実の世界の中の対象ではなく、そのような現実に関連する感覚単位に作用した産物である。この要素によって夢思考の形成と使用が可能になる。

③「夢思考」。ベータ要素およびアルファ要素が先に存在することに依存している。これは夢の顕在内容によって伝達されるが、顕在内容がより洗練された用語に翻訳されない限り、潜在的

なものに留まる。分析者は夢を通して、自分が扱うべき現象の直接証拠がある領域に到達する。

④「前概念作用」(pre-conception)。期待の状態に相当し、限られた範囲の現象を受容するために適応した心の状態である。早期の現れは、乳児が乳房を期待することであろう。前概念作用と現実化が結びついて概念作用を生む。

⑤「概念作用」(conception)。定数を代入された変数とみなされ、概念作用を未飽和の要素(ξ)を使って $\psi(\xi)$ で表すと、(ξ)に定数を代入するものは、前概念作用が結びつく現実化から由来する。

⑥「概念」(concept)。真実の解明や表現の道具に適さなくする要素から自由にしようとする過程によって、概念作用から由来する。

⑦「科学的演繹体系」(scientific deductive system)。仮説における概念の組み合わせを意味し、それによって概念は論理的に関連する。結合された概念や仮説はその意味を強め、全体の意味は各部分の計の意味よりも大きい。

⑧「計算式」(calculi)。科学的演算式は代数的計算式によって表現できるかもしれない。

以上、ビオンは第5章と第6章の分類を組み合わせ、図を呈示する。「グリッド(格子)」の中の座標軸に対して参照番号が示されている。

第20章でビオンは本書を以下のように要約する。精神分析の対象が、感覚単位・神話・情念の3つの「次元」をもつとしたが、分析対象の資格を与える前に、どれもB行、C行、G行に分類される特徴を示さなければならない。「解釈は分析的対象になされるが、分析的対象は必ずしも解釈されない。解釈は分析的対象の形跡(evidence)に基づかなければならない」という。分析対象は、観察者の $PS \longleftrightarrow D$ と α の作用の結果として生じる。分析的観察者は素材がバラバラに見えるが($PS \longleftrightarrow D$)、理解し難さに耐え、新しいまとまりが浮かび上がるまで持続しなければならない。その時点で分析者は $\rightarrow D$ に達し、「命名」(nomination)または「結び合わせること」(binding)に類似した段階となり、精神分析の対象が生じる。この時点から分析者は α によって「意味」が発達し表現できる。

3. 変形(1965)

第1章でビオンは、画家と分析家の類似を呈示する。画家は自分のみたものを絵の形にするために加えた「変形」(transformation)にもかかわらず、何かは変わらず残っており、これを「不変物」(invariants)と呼ぶ。精神分析でも不変な特性があり、課題は「精神分析の下で不変なものは何か、その相関関係の性質は何かを見出すことである」という。本書を通じてビオンが提唱するのは、精神分析の実践への批判的な接近方法であって、新しい精神分析理論ではない。

「変形」という用語は、以下の三者に関係する。①変形行為および最終産物を含む操作全体、これには記号Tを用いる。②変形の過程、記号は $T\alpha$ 。③最終産物、記号は $T\beta$ 。

第2章では、カントの「物自体」(thing-in-itself)という観念を導入して、不可知なものを記号Oで表示する。ビオンは、「分析治療によって、素材の不変物からOが何か、患者がOを変形するために何をしているのか、その結果として患者の変形の性質を発見したい」という。

第3章で、患者が自分の経験を変形して表象する過程は $Tp\alpha$ 、 $Tp\beta$ 、分析者の場合は $Ta\alpha$ 、 $Ta\beta$ と表示する。「転移」という用語は、感情と考えの或る適用範囲から他の範囲への運動というモデル含んでおり、この変形の集合を「硬直運動」(rigid motions)と定義し、「投影変形」(projective transformations)と対比される。

分析者は、患者が無意識である情動的経験を意識された情動的経験に変形するのを助けようとする。さらに分析者は精神分析の自分の私的体験を、それが公共的経験となるように変形しなければならない。

| | 定義的仮説 Definitory Hypotheses 1 | ψ 2 | 表記 Notation 3 | 注意 Attention 4 | 探求 Inquiry 5 | 行為 Action 6 | ...n. |
|---|--|-------------|---------------------|----------------------|--------------------|-------------------|-------|
| A ベータ要素 β -elements | A1 | A2 | | | | A6 | |
| B アルファ要素 α -elements | B1 | B2 | B3 | B4 | B5 | B6 | ...Bn |
| C 夢思考・夢・神話 Dream Thoughts Dreams, Myths | C1 | C2 | C3 | C4 | C5 | C6 | ...Cn |
| D 前概念作用 Pre-conception | D1 | D2 | D3 | D4 | D5 | D6 | ...Dn |
| E 概念作用 Conception | E1 | E2 | E3 | E4 | E5 | E6 | ...En |
| F 概念 Concept | F1 | F2 | F3 | F4 | F5 | F6 | ...Fn |
| G 科学的演繹大系 Scientific Deductive System | | G2 | | | | | |
| H 代数的計算式 Algebraic Calculus | | | | | | | |
| | | | | | | | |

図 グリッド

第4章を要約すると、精神分析では、分析者と被分析者とは等しく共通ではなく、変形のために両者が利用できないOはどれも、精神分析には関連しないとみてよい。変形すなわちTp α またはTa α は、いずれもL・H・Kによって影響される。分析者は患者との結合においてL・Hを考慮に入れるか排除すると想定されており、Ta α とTa β は、L・H（すなわち逆転移）による歪曲から自由であると想定されている。反対に、Tp α とTp β は常に歪曲を被っていると想定されており、その歪曲の性質は精神分析的な解釈によって解明される対象である限りで、分析者が観察から解釈に進む際にもたらず変形のOである。

第5章でピオンは、諸要素の「一定の接続」(constant conjunction)と思われるものを「変形」という名によって結びつける目的は、その「一定の接続」の「意味」(meaning)を発見したいからであると述べる。変形に影響を与える要素の中で、L・H・Kが必須の要素であるとみている。絵（変形）が肖像・戯画・漫画などに分類される絵画的芸術にみられるように、Oはあらゆる表現で同じであるが、変形の構成成分に従って異なる名前が与えられている。L・H・Kのどれが優勢かで全体の分類に影響を与えると見られる。

第6章でピオンは、「一定の接続」が観察者における意識の機能であり、その接続が必然的に意味をもつという。その意味は、自己-愛(self-love)、自己-嫌悪(self-hate)、自己-知(self-knowledge)の機能である。グリッドと変形の理論は分析状況の記憶に適用される。これらの振り返りの目的は、分析者の「直観」(intuition)を訓練し発達させる。

第10章でピオンはこれまでを振り返り、精神分析の解釈は無意識的なものを意識的なものにするこことされてきたが、解釈が無意識的なものを意識化させるかそれに失敗するかを解釈の基準とみることは、満足な基準を提供しないと述べる。「グリッドを用いれば、或る言明、その解釈、その両者の合成である言明を分類することが可能である。諸言明が割り当てられるカテゴリーの関係は、意識的及び無意識的という関係よりも、より啓発的なアプローチを提供できるのではないか」という。

第11章でピオンは、「Oにおける変形」に言及する。精神分析的解釈を通して、現実の自己の現象を知ることから、現実の自己であることへの移行をもたらすことは可能かという問題を提起する。Oに「ついて知ること」(knowing about)からO「になること」(becoming)への移行は、前概念作用から概念作用への発達の、個別的な例（D行からE行へ）と見なすことができる。治癒の精神分析的な概念作用は、或る要素が飽和され、それによってさらに飽和の用意がなされるような変形の観念を含むべきだという。つまり、「治癒」は「成長」と関係する。

第12章でピオンは、Oへの接近に触れる。解釈はKの一部であり、或る解釈への抵抗はKからOへの変化への抵抗である。「なること」への恐れのために、第2列次元は「心理的波乱」に対して向けられる。言い換えれば、Kにおける変形はOにおける変形の前兆を示すときに恐れられる。したがって、第2列の出現は、分析の事態において言明の進歩として観察される可能性があり、そこから分析者は解釈のための条件が到来したと判断できる。しかし解釈がなされなければならないということの意味しない。分析者の思考も成熟に達しなければならないからである。

4. 注意と解釈(1970)

第1章「序論」の冒頭でピオンは、「本書を易しくする最大限の努力をしたけれども、精神分析を実践している者以外が理解できるかどうか疑わしく思っている」と述べる。本書『注意と解釈』は前の3書と違って、各章に初めて見出しが記載されているのは、ピオンの努力の現れであろうか。ピオンが実践を強調するのは、感覚的体験を重視しているためであり、「理性は情動の奴隷であり、情動的経験を合理化するために存在する」という。セッションでは「発話」

(speech)の機能が重要である。精神分析者は、自分が言語を含む伝達手段について、物自体として扱っているのか、或いは伝達の諸要素すなわち身振り、行動、言語的定式化を使用して表す他の物自体について扱っているのかを決定すべきだという。「グリッドは精神分析者に、精神分析的経験において各要素を識別すること、特に伝達とその使用のされ方のどちらも重要であると認識することの必要性に注意させようとしている」と本書の目的が述べられる。

第2章「モデルとしての医学」でビオンは、精神分析と身体医学の分岐点として、身体医が「感覚的経験」の現実化(realization)に依存しているのに対して、精神分析者は「感覚的でない経験」に依存していると述べる。身体医が用いる「見る」「触れる」「嗅ぐ」「聞く」に対して、精神分析者はそれに匹敵するものとして「直観する」(intuit)を用いるという。

第3章「感覚的現実と心的現実」でビオンは、「分析者は自分の注意をOすなわち未知であり不可知のものに集中しなければならない」と述べる。記号Oは、「究極的現実、絶対的真実、神性、無限なるもの、物自体」といった用語で表現される究極的な現実を指し示す。精神分析者と被分析者はともに五感に依存しているが、精神分析が扱う心的な性質は五感ではなくて、フロイトが述べるように、感覚器官の心的対応物すなわち意識に付与した機能によって知覚される。

ビオンは、精神分析者はOに関わるが、それはKの活動を通してしか伝達されないという。KはO→Kの進展に依存し、O→Kの変形はKから「記憶」と「欲望」を除くことに依存するという。記憶も欲望も五感から得られた経験に由来し、快楽または苦痛の感情を呼び起こすもので、快感または苦痛を「包容する」第2列の機能はK→Oの変形を妨げる。ビオンが必要とするものは、究極的な現実と真実が存在するという「信念(faith)」(F)であると強調する。「信念」は科学的な心の状態であるという。

第4章「記憶と欲望の不透明さ」でビオンは、分析者は記憶、欲望、理解を停止することで「無限にならなければならない」(become infinite)という。こういう状態は、著しく退行した患者に似ており、昏迷に類似した睡眠状態に陥る可能性があるとも指摘する。Oとの接触が鋭敏になることは、知覚の増加、特にKの要素の増加と不可分であるという。第5章でビオンは、精神分析の実践に必要な不可欠の心的状態に到達するために、いかなる記憶の行使を回避し、記録を取らないと述べる。欲望に関しても、欲望を心に抱くことを回避し排除しようと試みるが、これはセッション中で試みるのは十分ではなく、欲望する習慣が育つことを許してはならないとまでいう。記憶と欲望の排除を通じて、フロイトがいうように自分自身を「人工的に盲目に」させることで、Fが達成されると論じる。

第7章「容器と内容」でビオンは、集団と神秘家(天才)の間の関係は次の三つのカテゴリー、すなわち「共存的」(commensal)、「共生的」(symbiotic)、「寄生的」(parasitic)のどれかに帰属すると述べる。寄生的関係では、関わりあう両者を破壊する何かを生み出す。これに最も近い現実化は羨望によって支配された集団対個人の状況で、羨望という情動は最終的に宿主も寄生者も同様に破壊する。共生的関係では、集団は敵意も善意も持つことが可能であり、神秘家の貢献は詳しい吟味の対象となり、この吟味から集団は成長し、神秘家も同様である。言葉・宗教・精神分析が制度化することはいずれも、神秘的な啓示とその創造的・破壊的力を「包容」するために記憶を制度化する例であるという。

第10章「視覚像と不変物」でビオンは、容器と内容との関係を表現するのに♀と♂という象徴を用いると述べ、それらの間の関係は共存的か共生的か寄生的であると繰り返す。「共存的」は二つの対象が第三者を共有し三者全部が益となる関係であり、「共生的」は相互利益のために互いに依存する関係であり、「寄生的」は互いに依存することで第三者を生み出すが、それが三者すべてに破壊的である関係を意味する。

第12章「変形された容器と内容」は、本書のまとめである。容器と内容という布置の論議は本書のかなりの部分を占めてきたが、ここでビオンは精神分析者が使用する重要な機制である「妄想-分裂及び抑うつポジション」にふれて、実践に関する定式化を以下のように提示する。精神分析者はどのセッションでも特に記憶と欲望に関して、自分にも被分析者にも未知のものに気づくはずである。自分が知っていることにしがみつこうとする試みは「妄想-分裂ポジション」に類比される心的状態になるために抵抗されなければならない。この状態を「妄想-分裂ポジション」と区別するために「忍耐」(patience)という用語を作った。この用語は「苦しみ」(suffering)と「欲求不満の耐性」と関連する。「忍耐」は或るパターンが「進展する」(evolves)まで「事実と理由を短気に追い求めることなく」(ジョン・キーツ)維持されるべきである。この状態が「抑うつポジション」に類比されるもので、「安心」(security)という用語を用いる。この用語は安全と減少した不安と関連する。分析者が解釈を与えるために必要とされる作業をなしたと信じることができるのは、「忍耐」と「安心」という二つの相を経た場合に限る。一方から他方への移行は、分析の終結期のように非常に速いかもしれないし、非常に時間がかかるかもしれない。要約すると、正しい解釈をしたという感覚は一般に、ほとんど直ちに抑うつ感が続くのが見られる。ビオンは、「忍耐」と「安心」の間の揺れの経験を価値ある仕事となされつつある指標として考える。

第13章「達成への序曲或いは達成の代用物」は最終章で、ビオンは精神分析の実践の幾つもの側面を議論するが、それらをキーツのいう「達成の人」に倣って「達成の言語」(the Language of Achievement)という表題の下にまとめる。「行動は言葉よりも雄弁である」と言われるように、「達成の言語」には行動への序曲とそれ自体一種の行動であるものの両者を含む。分析を「終結不能」にしてしまう普通気づかれていない誤りは、観察の失敗にあるという。人間は自分の心とそれに伴う思考に迫害され続けてきたので、心から不可分の憎悪を逃れてはどのような精神分析も正しく行われぬ。避難場所は、無思考状態(mindlessness)、性愛化、行動化、昏迷状態といった中に必ず求められる。だから、精神分析の注意は、「代用の言語」または「達成の言語」によって特徴づけられる素材の領域から離れてはならないという。

ビオンは、癌性の成長モデルは対象の分裂ではなく羨望の分裂であり、これは陰性治療反応として記述され、「断片化した羨望の増殖」という。要求されているのは、制止する衝動(the impulse to inhibit)を減らすことであり、この衝動は成長を刺激する対象への羨望である。求められているのは、神(母)の修復であり、神(形なく、無限で、言葉では言い表せない、非実在)の進展であるという。ビオンは「それが見出されるのは、記憶なく、欲望なく、理解なく、という状態にのみである」と締めくくる。

VI. 考察

ここで、ビオンの変形理論が生まれた背景、「グリッド」の意味、それに彼の精神分析の実践論について検討する。

1. 変形理論の背景

ビオンの「変形理論」が生まれる背景には、1950年代の精神病研究がある。『統合失調症の理論についての覚書』(1953)においてビオンは、統合失調症の言語の使用から、クラインがいう対象関係の奇異を解明しようとした。たとえば、思考の方が適切である時に、行為として用いられる。また患者は言葉を物として使用して、投影同一化によって分析者の中へ押し入れたり、分析

者が迫害していると感じられると、矛盾したことを述べて分析者の心を分裂させたりもできる。さらに、思考が行動に伴う欲求不満に耐えることを可能にするというフロイト理論からも着想を得て、ビオンは思考の機能とその重要性を拡張した。ビオンにとって、考えることは変形である。あらゆる発言は常に変形であり、だから「会話と解釈は同じ事柄の二つの異なった表現である」という確信をもつに至った。

ビオンは『精神病的パーソナリティの非精神病的パーソナリティからの識別』（1957）において、フロイト(1911)のいう「現実原則」がつくられる時に生起する発達に注目する。すなわち、外界への「注意」、意識の活動を貯蔵する「表記」、特定の観念への「判断」、実験的行動に対する「思考」へと発達する過程が、後に作られる「グリッド」の横軸に反映されている。

ビオンは『連結することへの攻撃』（1959）で、境界型精神病の症状形成の中で分析家と患者との「連結」が破壊されることをみて、妄想-分裂段階の部分対象関係に起源があるとした。ビオンの関心は言語性の思考に関わるだけではなく、正常発達の基礎として対象間の連結機能を重視した。『経験から学ぶ』（1962）で、対象間の結合に内在する因子として、L(love)・H(hate)・K(know)の3つが選ばれた。

ビオンは『考えることに関する理論』（1962）において、思考障害が存在するときに応用できる理論を提出する。「考え」(thought)の発達には「考えること」(thinking)と呼ぶ装置が必要であり、そのどちらかでも破綻すれば病理的な発達となるとみた。さらに「考え」は発達史の性質に応じて、「前概念作用」(pre-conception)、「概念作用」(conception)、「概念」(concepts)に分類する。これらは「グリッド」の縦軸に反映されている。前概念作用はカントのいう「空の思考」(先験的知識)に相当し、前概念作用が現実化と結びつくと「概念作用」が起き、それが固定化されて名前がつけられたものが「概念」である。さらに、ビオンは、「感覚データ」を修正して夢思考になるための素材を「アルファ要素」と呼び、思考になる前の物を「ベータ要素」として区別した。

2. グリッドの意味

『精神分析の要素』（1963）において、精神分析の実践過程を表現するのに必要な「精神分析的な要素」を探求する中で生まれたのが「グリッド」である。グリッドは思考の発達のエッセンスを表現しているので、ここでグリッドの意味を整理しよう（Symingtonら,1996）。

グリッドの横軸は、分析者が使用する解釈のカテゴリーを示している。

1列「定義的仮説」：一人の分析家の意見を示している仮説であるが、混沌とした事態への探索が始まる。

2列「 ψ 」（プサイ）：分析家が、何が起きているのか自分は分かっていると安心させようとするが、実は分かっている時の解釈。素材を理解できないことに分析家が耐えられないときになされる。この種の解釈は分析的探求に反するので、「-K連結」が働いている証拠となる。

3列「表記」：事実が記録されるので、「記憶」の機能に似る。患者と分析家はその回や前回のセッションの重要な事実注目するのにもこれに入る。

4列「注意」：分析家が現在の素材に関する仮定に患者の注意を促すこと。今まで観察された事実の意味を照らし出し、「選択された事実」への感受性が生まれる。

5列「探求」：焦点となっている特定の領域をもっと積極的に探求すること。「エディプスの列」とも言われるのは、エディプスが断固として探索を実行したからである（Grinbergら,1977）。

6列「行為」：行為への変形に関する思考の効用を表す。患者に反駁不可能な事実を突きつ

け、心の変化に導く。

グリッドの縦軸は、思考の発達の分類である。

A行「ベータ要素」：思考がそこから発達する原始母体で、まだ加工されていないデータ。

B行「アルファ要素」：感覚印象に対してアルファ機能によって引き出された原始的な思考要素。ただし、ベータおよびアルファ要素もアルファ機能ともに仮説的な存在である。

C行「夢思考・夢・神話」：感覚イメージの形で記述できるものすべてであり、視覚像を持つ。物語も含まれ、「神話」には個人の出来事の表現も含む。

D行「前概念作用」：心的成長が起こる過程の基本的メカニズムで、ぴったりと合う経験を探し求めている。この要素は未飽和な側面を持ち、適切な気づき（現実化）に出会うと飽和状態になる。

E行「概念作用」：前概念作用が適切な気づき（現実化）に出会うと飽和状態になりことから生まれる。概念作用は思考をつなぎとめることができる。

F行「概念」：真実の解明に適さないものを概念作用から取り去って浄化することで生まれる。この発見は真実が出現するのを妨げることもある。

G行「科学的演繹体系」：複数の仮説や概念の組み合わせから導かれる体系。これにより概念個々の意味がより高まる。

H行「代数的計算式」：科学的仮説を代数的計算式で表現したもの。抽象度が高いので、もはや言語を用いる必要がない。

以上のように、グリッドは思考過程の発達をみる意味で利点がある。グリッドに沿って下に降りる動きは思考の成長を表している。グリッドはセッション内で使うのではなく、セッション後の作業のために役立つものである。振り返りの目的は、分析者の「直観」を訓練し発達させることにある。

3. 精神分析の実践

ビオンは『変形』（1965）において、カントの「物自体」という観念を導入して、不可知の究極の対象を記号Oで表し、分析治療によって「素材の不変物からみてOが何か、患者がOを変形するために何をしているのか、その結果として患者の変形の質を知りたい」と主張する。その意味で、変形理論は「精神分析的観察の実践に関わる理論」とであると強調している。ビオンにとって、精神分析とは「情動的体験」を扱うことであり、さらにいえば「情動的体験を生む他者との関係」を扱うことである。ビオンは人と他者繋ぐ「連結」が引きおこす情動的体験として、愛（L）、憎しみ（H）、知（K）にまとめ、それぞれの否定ないし反転は、-L、-H、-Kと記号化した。

ビオンは『経験から学ぶこと』（1962）において、クラインの「投影同一化」について、乳児が悪い感情を良い乳房へと投影し、それが取り除かれて再び摂取されることであると説明する。このとき見られる母親の「夢想」(reverie)は、愛している対象に由来するどんな対象をも自由に受け取る心の状態であるので、アルファ機能の因子であり、投影同一化はのちの思考能力の早期の形態という。さらにビオンは、対象が投影される「容器」(container)と容器に投影できる「内容」(contained)という用語を使い、容器を記号♀、内容を記号♂と命名した。♀♂の原型は、母親の乳房-赤ん坊の間で、苦痛な赤ん坊（患者）が母親の乳房を探し求め、母親の乳房（分析家の心）によって発見されるという図式であり、発達の各段階で起こる心の成長の仕方を意味する。母親の夢想はアルファ機能があり、赤ん坊に吸収されやすいように情動経験を消化する。♀と♂の連結には、「共存的」「共生的」「寄生的」のどれかの関係がある。これらの関係

は、L・K・Hに対応するであろう。

ビオンの「容器」という概念が心であったり、集団であったり、国家であったりする。これは彼のグループ研究に由来するといえよう。ビオンはグループ研究において、「原始心性の体系のなかには、3種の基底的想定のプロトタイプが存在する」と仮定し、最後に「基底的想定のプロトタイプの心的状況は互いに類似点を持ち、そのことは3者が基礎的な現象ではなく、むしろ、より根源的なものだと考える価値のある状態の表現であるか、あるいは、その状態に対する反応であるかもしれない」と推定する。これについて、土居（1997）は、ビオンが想定している前段階としての精神状態とは「甘え」に相当すると考えられ、グループの凝集性とは「甘え」に他ならないと指摘している。また、シミントンら（1996）が指摘するように、ビオンのいう「容器」とウィニコット（1896-1971）の「抱えること」あるいは「抱え環境」とは類似している。しかし、「容器」は内的なものであるが、ウィニコットのそれは外的、あるいは内的と外的との間の移行段階であり、「容器」は統合的にも破壊的にもなり得るが、「抱え環境」は肯定的であり成長促進的であるという違いがある。

「甘え」と類似の概念である「一次愛」を提唱したバリント（1896-1970）は1938年にブタペストからロンドンに移住し、イギリスで活動した精神分析医である（中野，2016）。ビオンもウィニコットもバリントも、イギリスで活躍した同世代の分析家である。バリントはクライン理論には批判的であり、ウィニコットはクラインからスーパービジョンを受けたものの、クライングループから独立していた。この3人の中でクラインと一番強い絆があるのはビオンであった。ビオンはクラインから脱却してオリジナルな理論を提出するには、カント哲学が必要であったのであろう。さらにビオンが『注意と解釈』（1970）で述べている精神分析者のあり方として、「記憶なく、欲望なく、理解なく」と述べるころは、インド哲学の“解脱”や“無我”を連想させる。その意味で、“Seven Servants”すなわち「知恵の七本柱」の七人目は、解脱者が到達する「直観」なのであろう。

文献

- 1) Bion, W. R. (1961). *Experiences in Groups and Others Papers*. London: Tavistock Publications. 池田数好(訳)(1973). 集団精神療法の基礎. 岩崎学術出版社.
- 2) Bion, W. R. (1967). *Second Thoughts. Selected Papers on Psycho-Analysis*. New York: Jason Aronson. 松木邦裕(監訳) 中川慎一郎(訳)(2007). 再考: 精神病の精神分析論. 金剛出版.
- 3) Bion, W. R. (1982). *The Long Week-End. 1879-1919. Part of life*. London: Karnac.
- 4) Bion, W. R. (1977). *Seven Servants. Four Works*. New York: Jason Aronson. 福本修(訳)(1999). 精神分析の方法 I・II. 法政大学出版局.
- 5) Bion, W. R. (1994). *Clinical Seminars and Other Works*. London: Karnac. 祖父江典人(訳)(1998). ビオンとの対話—そして、最後の四つの論文. 金剛出版. 松木邦裕・祖父江典人(訳)(2000). ビオンの臨床セミナー. 金剛出版.
- 6) 土居健郎(1997). 「甘え」理論と集団. 「甘え」理論と精神分析療法. 金剛出版 pp182-192.
- 7) Freud, S. (1911). Formulations on the Two Principles of Mental Functioning. *S.E.*, 12: 213-226. 井村恒郎・小此木啓吾(訳)(1970). 精神現象の二原則に関する定式. フロイト著作集6 人文書院 pp42-48.

- 8) Freud, S. (1924). *Neurosis and Psychosis*. *S.E.*, 19: 147-153. 吉田耕太郎 (訳) (2007) : 神経症と精神病. フロイト全集18 岩波書店 pp239-244.
- 9) Grinberg, L., Sor, D., Bianchedi, E.T. (1977). *Introduction to the Work of Bion*. Jason Aronson. 高橋哲郎 (訳) (1982) : ビオン入門. 岩崎学術出版社
- 10) Klein, M. (1946). *Notes on Schizoid Mechanisms*. In Klein et al. (eds.), *Developments in Psycho-Analysis*. London: Hogarth Press, 1952. 狩野力八郎 (訳) (1985) : 分裂的機制についての覚書. メラニー・クライン著作集4 岩崎学術出版社 pp 3-32.
- 11) 乾吉佑 (監修) ・横川滋章・橋爪龍太郎 (編著) (2015). *生い立ちと業績から学ぶ精神分析入門*. 創元社
- 12) 中野明德 (2016). マイケル・バリントの「一次愛」論 - 土居健郎の「甘え」理論と比較して. 別府大学大学院紀要, 18, 21-38.
- 13) Symington, J. and Symington, N. (1996). *The Clinical Thinking of Wilfred Bion*. London: Routledge. 森茂起 (訳) (2003). *ビオン臨床入門*. 金剛出版.